Akita University

学校が「学校を利用する」という考えを受け入れるまで†
ーある生徒をめぐるナラティヴの変化ー

柴田　健*
秋田大学教育文化学部

本稿では，スクールカウンセリングにおける不登校の事例へのナラティヴ・プラクティスについて報告する．家庭内暴力などの問題行動のある不登校生徒とその母親に対する教員の認識は，母親の関わりに問題があるという欠損記述が中心だった．SCは，担任を含めた生徒や母親との面接，担任や関係者へのコンサルテーションを繰り返した．SCとチームを組んだ担任の努力により，この生徒に関心を示す教員が増えていき，それに伴って生徒と母親をめぐる語りは欠損記述から彼ら自身の努力を示す語りへと変化していった．教員の生徒をめぐる語りの変化に伴い，中学校での不登校生徒に対する関わり方にも変化が見られるようになった．生徒の登校行動は，最後まで悪化と改善を繰り返したが，最終的には「学校を利用する」という新たな語りの中で生徒への支援が続けられた．考察では，SCと担任が発信した生徒と母親に関する新たな語りが，「関心コミュニティ」の形成を促進したことが指摘された．さらに，関心コミュニティが生徒と母親に関する語りにとどまらない変化を生み出したことが指摘された．こうした変化は，我々の理解を一定の方向に導き制約するという語りの持つ潜在的な力によるものであると考えられた．

キーワード：スクールカウンセリング，不登校，ナラティヴ・セラピー（プラクティス）

Ⅰ　はじめに

学校臨床においてスクールカウンセラーが関わる事例のほとんどは，学校コミュニティの成員によって何らかの困難や問題が認められたものか，個人が学校コミュニティの中で何らかの困難を体験し自ら来談を求めたものである．そのため，スクールカウンセラーは個人臨床として事例を見立てるだけでなく，学校コミュニティと個人の相互作用を考え支援を進めていく必要がある．このことについて倉光（2004）は，学校を一つの有機体とみなし，内部の力動と外部の力動をともに全体としてとらえる視点の重要性を指摘している．伊藤（1998）は，地域環境や学校の歴史，学校の雰囲気などが個人の人格や家庭環境，生育史の視点と似ていることを指摘し，こうした学校風土を個人病理になぞらえて見立てるというスクールカウンセリングを提唱している．また，赤川（2010）は，学校やそれを取り巻く地域環境を父性原理と母性原理から考え，それが個人にどのような影響を及ぼすのかを考察している．

本稿では，これらのとらえ方とは異なる視点として，学校を教師や生徒，地域の関係者が織りなす語り（ナラティヴ）の総体であると考える．学校には組織や校風，校史といった公式のとらえられ方から見えてくる姿と，毎日生徒や教師がする話や周囲の評判など学校にまつわる様々な話題から自ずと形成されていく姿がある．日々様々な語りが織りなす学校の姿は常に変化しているものとして考えることができる．それは学校の歴史的視点はもちろん，学校と周辺環境との関係，生徒や教師の様々なエピソードが含まれる，学校の人生語りのようなものといえ

2010年２月15日受理
†Processes of One School Accepting a New Idea "*Using School*" : Teachers' Attitude Changes about a Student who Refuse School
*Ken SHIBATA, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

Akita University

よう.

こうした人生語りについてセラピストらがクライエントとの間の共働的作業を通して人生のストーリーを理解し，そのストーリーを書き換えていく方法がナラティヴ・セラピーである．ナラティヴ・セラピーでは，問題を「言語によって他者とのコミュニケーションを通してできた創造物（小森・野村，2003)」と見なす．対象者は問題や障害を持っているのではなく，このような人生の語りを持って生活してきたのである．こうした見方を敷衍すると，スクールカウンセリングで扱う事例も学校の語りの中で問題や困難として語られてきたものであるというとらえ方ができ，学校の語りが変化すれば，その中で語られる問題も異なってくるものと考えられる．小森・野村（2003）は，ナラティヴ・セラピーでは，「多くの異なる文脈で実践され，そして絶えず変化していく活動の範囲が限定されてしまう」として，ナラティヴ・プラクティスという言葉を用いることにより，ナラティヴ・セラピーの範囲を拡大している．

本稿では，スクールカウンセリングにおける不登校の事例へのナラティヴ・プラクティスについて報告する．事例の舞台となる中学校は，その歴史から不登校や問題行動に対して比較的厳しい対応を取ることが多かった．家庭内暴力などの問題行動がある不登校の生徒と母親，担任等の関係者に対するスクールカウンセリングを通し，生徒とその家族をめぐる語り（ナラティヴ）は変化していった．こうした語りの変化は，学校の問題のとらえ方を変化させ，学校の行う不登校に対する対応もまた変化していった．筆者の行った面接とコンサルテーション，さらにこの中で自然に生じた出来事を時間経過の中で示し，介入に伴う生徒と母親，学校の変化を明らかにし，その中での語りの果たす役割について考察する．

Ⅱ　事例の概要

対象生徒：A男，中学３年.

主訴：学校に来ないで無職少年と遊び歩いている（担任による表現).

家族構成：父方祖母・母（45歳）・姉（高校生）・妹（小学校低学年）・A男の５人家族．父親は，A男が小学校高学年のときに自殺している.

SCが関わるまでの経過：A男は興味関心の幅が狭く，アニメやゲームが大好きな少年だった．また，小学校の頃から学校を休むことが多かったらしい.

中学１年のときの担任は今と同じだった．この１年間は普通に登校することができたが，２年生の２学期から不登校状態になった．当時の担任による家庭訪問が続けられるようになったが，全く登校できないまま３年生を迎えた．その間家ではテレビゲームに夢中で，生活リズムもかなり乱れていたらしい.

その後，本人と母親が地元の児童相談所に不登校を主訴に通所指導を受けるようになった．児童相談所の心理診断では，何らかの発達の偏りを指摘されていた．A男本人は担当の児童心理司に対して好感情を抱き，母親も児童相談所に通所するようになってから本人が自発的になったと喜んでいた．しかし，担当児童心理司の転勤によりX年３月で通所指導は終了となっていた.

Ⅲ　中学校の概要

1.　環境と歴史

各学年６クラスで，全生徒数は約600名，教員数は約40名である．学区は広く，古くからの住宅地や新興住宅地，近隣の農村部までを含んでいる．校内暴力が頻発した時期があり，荒れる学校として地域で有名だったが，学校が生徒指導の強化や学校行事の改正等で危機を乗り切ったという歴史がある．運動会，合唱祭，学園祭，地元の祭りへの参加，雪祭りという５つの主要行事があり，これらの行事は全て各クラスによって競われている.

各学年によって使用される階段やトイレが定められている上，集会の移動のときには必ず全校放送によって行進曲が流されるなど独特のルールがある.

筆者が着任したとき，校内暴力や非行といった問題行動を示す生徒は減少していた．しかしその一方で，不登校の生徒が増えている実情にあった.

これまで行なわれてきた不登校への取り組みは担任による家庭訪問が中心だった．授業がつまらない生徒の逃げ道になれば困るという理由から，保健室登校や相談室登校は禁止されてきた．生徒が地元にある適応指導教室に通い始めると，教員によるそれ以上の関わりは行なわれないことが多かった.

筆者はこの中学校にX年４月から，スクールカウンセラーとして週１回８時間勤務をした．教育相談は，生徒支援担当という校務分掌の中にある．「心

Akita University

の教室」という名の相談室があり，ここがスクールカウンセラーと生徒支援担当の主な活動場所になっていた．「心の教室」は，空き教室を改良したもので，教室の約半分のスペースのところに相談室と，生徒たちが活動できるスペースがあった．職員室では，4年部の養護教諭の隣にスクールカウンセラーの机が置かれていた．

この中学校にスクールカウンセラーが配置されたのは筆者で3人目だった．スクールカウンセラーの配置が行われなかったときは，心の教室相談員が相談活動を行っていた．一人目のスクールカウンセラーは個人とのカウンセリングを中心に行い，二人目は教員との関係作りを中心に活動した．教員との関係作りを中心とした活動が比較的好評であったことを養護教諭から聞き，筆者はそれを踏襲するところから活動を始めた．

2. 主な学校関係者

担任：男性教員．この中学校が一番荒れているときに赴任し，その当時の先生方と荒れている状態を立ち直らせた実績がある．A男の指導に非常に熱心である．

養護教諭：赴任2年目．荒れていた時代のA中学のことは知らない．保健室に常にこころのノートや絵本を置き，保健室の隣りに独自の相談室を作り，生徒がいられるようにするなど生徒のこころの問題に熱心に取り組んでいる．

生徒支援担当主任：1年部の副主任も務める女性教員．この中学校では，生徒支援担当が生徒や保護者の相談と，月一回開催される生徒支援推進会議を招集する役割を持っている．生徒支援担当主任であることから，生徒指導を中心に行ってきた教員からは生徒に甘いという印象を持たれている．

生徒指導主任：教育相談に関して理解のある男性教員である．

教頭：以前教育事務所にいたことがある．筆者は着任時に保健室登校や相談室登校は禁止していること，授業中の生徒への相談活動をしないでほしいことを忠告されている．

3. 学校に対する印象と活動方針

生徒に対する管理が厳しいというのが，着任しての第一印象だった．筆者は当初学校の方針に従うことから始め，校内の様々な情報を生徒支援担当教員と養護教諭，生徒指導主任から得るように行動した．

特に，養護教諭は席も隣ということもあり，様々な情報を得ることができた．また，比較的早い段階で養護教諭が保健室登校の必要性を感じていることも明らかになった．

生徒支援推進会議がほぼ月1回開かれていたが，その内容は不登校の生徒の情報交換で終わっており，学年主任からは意味がないという話が出ていた．そこで，生徒支援担当主任に，生徒への具体的な関わりの提示と，それに伴う変化を主要なテーマにして会議を持ってはどうかと提案した．しかし，この提案は各学年主任から拒否され，具体化されることはなかった．

Ⅳ 関わりの経過

A男に対する関わりは，本人面接1回，母親面接（電話面接を含む）8回，合同面接3回，コンサルテーション・チーム活動（以下コンサル・チーム活動と記述）10回からなる．これらの関わりをA男の状況の変化をもとに4期に分類した．なお，面接やコンサル・チーム活動に分類できない出来事を太字で示した．

1. 関わりの開始

表1に，4月に行われた生徒支援推進会議におけるA男とその家族についての記述を示す．（表1）

表1 生徒支援推進会議資料（4月）

夕方家庭訪問に行った限りでは，明るい表情も見せている．朝は次第に起きることができている．しかし午前5時頃に起きてその後時間があるため寝過ごしてしまっている．その結果登校時間には一番眠い状況になるという悪い結果につながっている． 母親と祖母との関係がうまくいっていない．母親は，仕事から帰るとすぐに自分の部屋に行き，食事の支度や子どもとの会話がないようである． 少しずつで良いので，学校に行ってほしいと思っている．しかし，あまり強制せず，見守りながら説得していきたいと考えている．まずは，生活リズムを定着させたい．そして少しずつで良いので登校する回数を増やしていきたいと思う．修学旅行には行きたいという思いがあるため，それを登校のきっかけにしていきたい．その後は，本人と進路について考え，目標を持たせながら支援する方法を考えていきたい．

Akita University

(1) 発端

A男の母親がスクールカウンセラーに相談したいという話をしているということが，生徒支援担当主任を通して伝えられた．依頼は担任からだった．面接時間がすでに決められていたため，担任とのコンサルテーションは面接当日となった．

(2) コンサル・チーム活動1〔X年5月〕

担任から次のような情報が得られた．

「A男は今年新しいクラス編成になってから，2日間だけ自分で来た．朝の家庭訪問を繰り返しているが，そのまま指示に従ってくるときもあれば，部屋に行ったら閉じこもって入れてくれないこともしばしばあった．休みの日と夕方の調子は良いのだが，朝は苦しいらしい．『遅刻してでも来ればいいだろう』と話すとA男は『遅刻したのを人に見られるのは嫌だ』と話す．時々無理して学校につれてくるのだが，母親もどのように関わったらいいのかわからない様子で困っている．連休中には（不良交遊のある）元気な子と生活をともにしていた．母親の話だと夜9時頃遊びに行って，朝方帰ってきたりする．A男本人はやっていないというが喫煙もあるらしい．5月の連休後は来たり来なかったりを繰り返している．行動が危なっかしくて見ていられない．

母親は感情面で波の大きい人．本人に対して溺愛と突き放しという両極端の対応をする．また，話す内容もよく分からないことが多い．祖母の話だと，母親は家に帰ってくると2階に上がって降りてこないらしい．父親が自殺する前に，母親は父親をずいぶん責めていたことがあったらしく，それが自殺の原因になったとのこと．A男本人もずいぶんそのような母親から追いつめられているのかもしれない．子どもの対応が普通の親と違うのかもしれない」

筆者が（以下SCと記述）担任とA男がどのような話をしているのかと尋ねると，「できれば全日制の高校に行きたい．中学校には行く気はあるのだけれど，制服がなかなか着られない」などと話しているとのことだった．来ることができる理由について担任は，「私が訪問をしたときには来ることができるようだ」と話した．担任によると，自分が訪問したときは学校に来て教室に入る．しかし，その後は保健室に行ってそのまま帰ってしまったりするとのことだった．

SCはこれまでの担任としての関わりをねぎらいながら，「どのようになれば，こうして話し合ったことが役に立ったと思えますか」と尋ねた．すると担任は，「学校に来ないで有職・無職少年と遊んでいるので，それを減らして少しずつでもよいから学校に来てほしい．また，生きがいを見出してほしい」と話した．

今日，A男本人がどうやって来るのか尋ねると，「今母親が来る予定．本人も遅れてやってくる（引っ張り出してくる）予定」とのことだった．

2. 怠学傾向の不登校の時期

(1) 合同面接1〔X年5月〕

その数時間後，母親と妹が来談．担任により引っ張り出されたA男本人も間もなくやってきて面接が始まった．

A男は背が高くやせていた．めがねをかけて細面でおとなしく座っているA男からは，「元気な子」と遊び歩いているという印象はなかった．母親はうつむき加減でやや暗い印象を受けた．

「よくここに来たね」とねぎらった後，「来てみてどう？」と来談の印象を尋ねた．すると彼は，「学校に来て友達と一緒にいる方が楽しい．（先生が）『明日迎えに行けばいいか？』と言ってくれる．先生も心配してくれているし，クラスのみんなも心配してくれている」と話した．「でも学校に行きづらいなと思うときはある．怠けたりもしている」とも話した．SCが「すごいな，よくわかっているな」と驚くと，A男は得意げに「先生に何回か相談しているし」と言った．

SCは母親に対し，「こんな彼をどう思いますか？」と，良い評価を期待しながら尋ねた．すると母親は，真剣なまなざしで「どういう風に思われてもいいんです．この子を守るのは私だというのがある．死んだ夫にも心配かけられないというのもあるんです」と話しだした．突然の話の展開に驚きながらも少し母親の話に耳を傾けていると，それは夫の自殺の話や子どもに対する思いの話になっていった．父親が亡くなる前に，子どもをよろしく頼むといわれておかしいなと思ったこと，自分にとって子ども達はどんなに出来が悪くても宝であることを，母親は陶酔したような表情で話した．気がつくとSCは全く母親の話をコントロールできなくなっていた．それと同時にA男の行動はどんどん落ち着かなくなっていった．担任の言う「追いつめられる」とい

Akita University

うのはこういった状態のことだろうか，などと考えながらSCは母親の独り言にも似た話を聞いていた．

母親の話が学校や担任への感謝のことになり，SCはようやく口を挟むことができた．学校や担任のことについてA男に尋ねると，「勉強は嫌いだけど，勉強は気にするなと先生が言ってくれて，その分学校に行きやすくなった」と話した．

「これからどうなればよいでしょう」というSCの質問には，A男は「これからずっと学校に通い続ければ楽になれるかな」と言い，母親は「友達を作れ！」とA男の方を向いて言った．

学校に来る自信についてスケーリング・クエスチョン（DeJong & Berg，2008）をしたところ，A男本人は「7か8くらい」，母親は「4か5」と話した．その理由について，A男は「今回来れば，他のこととか気にしないでくれると思う」と述べ母親は，「ずいぶん変わって来ています」と話してくれた．

家の中でのA男の様子についてのスケーリング・クエスチョンに対して，母は8くらいと述べた．その理由は「朝早く起きることができ，ご飯を食べている，上の子から何も言われなくなってきた，口の利き方が違う」ということだった．

間もなくやってくる修学旅行のことをA男に尋ねると，「もちろん行く」とはっきりと答えた．

その後，話題は転勤した児童相談所の児童心理司のことになった．A男は，「あの先生は面白い．気を遣わなくてよい先生だ」と話した．SCは，その児童心理司のように面白く，A男が気を遣わなくてよい態度をとるように心がけることを約束した．

(2) 初回面接のアセスメント

母親には自殺により夫に先立たれたことの影響が明らかに認められた．夫からこの子を託されたという母親の気負いがA男にとって圧力となっていることがうかがわれた．このことは母親の自己陶酔的な話が始まると明らかにA男の行動に変化が見られたことからも推測された．しかし，こうした母親の指示は，母親独特の抽象的，感情的な会話のために十分にA男に伝わっていない可能性があった．児童相談所から何らかの発達の偏りがあるという心理診断結果が出されていることを考えると，こうしたコミュニケーションのずれは，母親とA男の両方で生じている可能性があった．

スクールカウンセリングという状況を考え，面接では母親とA男のコミュニケーションの修正を試みることを第一とし，母親の自死遺族としての感情についてはできるだけ扱わないこととした．しかし，母親の現状に対する無力感が強いことが察せられたので，母親のエンパワメントを中心に考えながら，徐々にコミュニケーションの修正を図っていくことを方針とした．

生徒支援推進会議の記述に見られるように，学校では担任も含めて母親の行動が問題であるという考え方が優勢であり，こうした考えを修正していく必要があると考えられた．また，担任の熱心な登校支援が学校の中で取り上げられていなかったので，こうした関わりを学校の中で共有する方法を考えていく必要があった．

(3) コンサル・チーム活動2〔X年5月〕

A男と母親のコミュニケーションの問題については担任も感じていたことであった．そのため，これをどのようにして変化させるのかということを中心に考えることを担任に伝えた．担任に対する母親やA男本人の信頼が非常に高いため，それを大事にすることも担任との間で確認された．

(4) コンサル・チーム活動3〔X年6月〕

A男は修学旅行には行くことができたものの，その後学校に来なくなってしまった．担任が訪問しても，部屋に閉じこもって出てこないことが続いた．こうしたA男の態度に母親は落ち込んでしまい，A男を施設に入れる話をするようになっていた．

担任の訪問は，先生とA男のお互いにとって負担になっていることが考えられた．そこで，週2回程度の家庭訪問は続けるとして，本人を引っ張り出すことはしないほうがよいかもしれないことを伝えた．担任もそれに了解した．

(5) 母親面接（電話による）1〔X年6月〕

早急に母親と面接をする必要があると感じたSCは次回の来校日に母親の面接を行なうことを担任と話し，その後母親に電話連絡をすることにした．そして，面接の約束によりA男と母親自身に負担をかけてしまったこと謝りながら，いつでもA男の希望で面接日を設定できることと，今後母親面接をする旨をA男本人に伝えてほしいと依頼した．さらに前回の母親とA男との面接を踏まえ，「家の中でこれからも続いてほしいと思えるようなことや解決の手がかりになるようなことを探してほしい」ということを依頼した．

Akita University

(6) **母親面接2〔X年6月〕**

電話による面接の1週間後，面接が行なわれた．母親はかなり落ち込んでいる様子だった．A男は昼夜逆転に近い生活をしていた．「こんな大変な中でどうやって頑張っているのか」を尋ねると，話は再び亡くなった夫のことになり，しばらくの間SCは口を挟めない状態が続いた．なかなか流れに乗れない感覚を抱きながら，この面接が役立ったときにはどんな変化が生じているのかを尋ねると，「(A男が) 朝起きて，顔洗って，朝着替えて学校に行っています．友達も変わっていて，新しい友達ができています．そして思ったことを友達に話せていると思います」と話した．母親との関係について尋ねると，「用があるときだけ私のところに来るようになって，それ以外は家では姉や下の子と話したりしています」と考え込みながら話した．そして，「私はまだ何とかできるのではないかと思うんですよ」と言った．その理由を尋ねると，自分に対して返事をしてくれることや下の子をかわいがってくれることなどを話した．SCは母親が，問題が起こってもよいと思われる状況でそうならなかった「例外(DeJong & Berg, 2008)」を見つけ出していることを指摘し，「それもこれまでの関わりの結果ですね」と評価した．スケーリング・クエスチョンの結果は5．母親自身が本人を受け入れることができているし，少なくとも家の中では私とコミュニケーションをうまく取れているからと，その理由を話した．母の努力を評価すると，「彼の成長を認めるのは私の役割なのです」ときっぱりと言った．

(7) **コンサル・チーム活動4〔X年6月〕**

担任に面接の内容を伝え，母親を支えるという意味での定期的な家庭訪問すること，また今後の面接にはできる限り担任も入ってもらうことを依頼した．これは，担任に面接に同席してもらうことによって母親が問題であるという考えの変化を図ることと，担任を起点にA男と母親に対する支援システムを拡大させるという意図があった．

その後，授業に支障のない範囲で担任も面接の中に入ることになった．

(8) **母親面接3（担任同席）〔X年7月〕**

SCは母親とA男の会話について円環的に尋ねることを心がけた．多くの会話は，メッセージとして曖昧なものであり，A男が母親の会話の不明瞭さからイライラしていることが確認された．その一方で，A男本人が7月から学校に行くかなという話が出たが，「だったら，いけばいいでしょ」と言ってやったと自慢げに話すなど，母親自身には現状に対する余裕が感じられた．

同席した担任からは毎週の家庭訪問の様子についての話が出た．A男はゲームをしているか寝ていることが多いが，表情はとっても明るいということを担任は強調し，母もそれにうなずいていた．

SCは担任の了解を得ながら，実験と称して母親のA男に対する会話をランダムにコントロールするゲームを伝えた．

(9) **母親面接4（担任同席）〔X年7月〕**

自動車のテールランプ部分が全て割られているのを発見したが，どうやらA男がやったらしいということが語られた．本人は否定しており，「警察に被害届を出さなきゃね」とさりげなく言っておいたと母親は話した．担任はこの事件について不安そうに聞いていたが，母親のA男への対応を聞いて安心した様子だった．

母親の会話は依然として曖昧なコミュニケーションが多く，前回提示した「実験」についてもうまくできていない様子だった．母親の自動車を壊したというA男の行動から，A男自身に何らかの不満がたまっていることが推測された．

このようなことがあったにもかかわらず，母親はA男の変化に喜んでいた．A男は夏休み中の中学のプールに泳ぎに来たりしていた．SCは，多少戸惑いながら「お母さんずいぶん強くなりましたね」と話すと，「なんとなく自信がついてきました」と話した．

(10) **コンサル・チーム活動5〔X年7月〕**

担任には，生徒支援推進会議の中でA男に対する関わりをアピールしてもらうように依頼した．担任の書類が学年主任経由で生徒支援担当主任に回覧され，全教員の目に触れることになる上に，会議には校長以下管理職が全員参加するため，母親が問題であるという考えを変化させることができると期待された．

3．家庭内暴力が発覚した時期

母親からA男に対して示されるメッセージをコントロールする必要があると考えていた矢先，A男の不良交遊と家庭内暴力が発覚した．

(1) **母親面接5〔X年8月〕**

Akita University

母親は，家が有職少年や無職少年のたまり場になり，A男が飲酒喫煙を繰り返していることを話した．しかも母親は，注意を受けたA男からしばしば木刀で殴られるようになっており，警察を呼ぶこともあった．さらに，夏休みの初めにはその仲間たちと一緒に他の中学の生徒と喧嘩をしていたこともわかった．母親には学校で今後の対応について緊急で協議する必要がある旨を伝えた．

(2) コンサル・チーム活動6〔X年8月〕

面接終了後，教頭，生徒指導主任，担任，SCで対策を協議した．母親がまだ施設処遇を考えていないこと，A男への学校の関わりを望んでいることから，児童相談所等の相談機関に通告や紹介はしないこととした．そして，今後家庭内暴力が生じないことを目標とした危機介入を行なうこととした．

その後，具体的な面接の方法が話し合われた．担任とSCの提案により，従来行われていた強い説諭の方法とは異なった方法を用いることで，A男本人と母親に対して現状の困難さを知ってもらうことになった．そのために現状の危険性を本人に伝えるという情報提供を行うことを第一の目的に面接を行うこととした．生徒指導主任や担任，教頭が見守る中で本人の現状を少年法に照らし合わせていき，現状がいかに危険な状態なのかを本人と母親の前で確認し，その後担任とSCが今からだったらまだ大丈夫ということを話し励ますという構造をとることになった．その後，再び家庭内暴力が起こった際の母親の緊急避難場所を確認した．

(3) 合同面接2:コンサル・チーム活動7〔X年8月〕

3日後に面接が行なわれた．面接には教頭，生徒指導主任，担任，SCが同席した．

面接は従来使用されていた相談室ではなく校長室の来客用のソファを用いて行われた．生徒指導主任が，少年審判の経過図をもとに本人と母親に説明をした．そして，母親を木刀で叩いて怪我をさせたことと他校の生徒に怪我をさせたことは刑法の「傷害罪」に当たること．さらに，家をたまり場にして母親の指示に従わず，深夜徘徊をしていたことは，少年法の「虞犯」に当たることを説明した．生徒指導主任は手元の図を指し示しながら，今後も問題行動を続けた場合には少年鑑別所に入り，少年審判を受ける可能性があることを二人に伝えた．同席した教頭は何も言わず，生徒指導主任の話にひたすらうなずくという役割をとった．

その後，こころの教室に場所を移し，A男と母親，担任，SCの面接が続けられた．SCは過去に自分が職員として体験した少年鑑別所の生活について話した．担任は，「今そちらに行くのもこのまま家にいられるのもお前次第だからな」とA男を励まし面接を終えた．

(4) コンサル・チーム活動8〔X年8月〕

SCは教頭や担任，養護教諭，生徒指導主任，生徒支援主任と，保健室登校の可能性を探ることについて打ち合わせを始めた．教頭や一部の教員は保健室登校に対して授業が嫌な生徒のたまり場になるのではないかと難色を示したが，養護教諭や担任，生徒支援主任の説得により，了承を得られた．そうした生徒がいればという条件付きながら，保健室登校の体制が整えられることになった．

翌週からA男は学校に出始めた．担任は毎朝食事を準備して，本人を迎えにいった．こうした担任の姿を見て，母親が朝食を準備してくれるようになった．A男は朝食を食べながら登校するようになった．

(5) 合同面接3（担任同席）〔X年9月〕

A男は学校に来ていることを照れながら話した．同席した担任がずいぶん変わったことを指摘すると，「学校に来れば面白い．友達と話ができる．家にいてもゲームだけしているとつまらないから」，と話した．それに，少年犯罪の紙を見て施設に行きたくないと思った，という話もした．

母親は，「私は，この子を信じていました．それがこんなになるようになって，とてもすごいと思います．これで死んだ夫に対して顔向けができます．あんたはあんたの人生を進めばいいんだといつも言っています…」と再び独り言のような会話を始めた．同時にA男が隣でいらいらし始めた．曖昧なコミュニケーションがA男を混乱させているのは明らかだった．そこでSCは，母親の話がだいたい終わったところでA男に対して話の感想を求めた．「母さんが自分のことを思ってくれていて感動した」とA男は話したが，その表情は明らかに混乱したものだった．そこでSCは母親の話のあいまいさを指摘して，学校の先生は四字熟語で話ができると言い，担任と学校の中で使われる四字熟語を言い合った．初めは半ば怒った表情でその会話を聞いていた

Akita University

母親だったが，次第に表情を崩し，「四字熟語なんですね」と納得したように言った．その後は母親が話してくれた話を四字熟語に修正することを全員で行った．

その後今の状況についてスケーリング・クエスチョンをすると，母親は6，本人は5とのことだった．A男はスケール5について普通に来られるようになったこと．毎日普通なことと述べた．1上がったとき彼はどう変わっているかという問いについて母親は「意思を持つ心があり，分別がつくようになる」と述べたがそれは担任のほうから四字熟語に訂正された．担任はその後も家庭訪問することを本人と母親に約束した．

担任の訪問活動についてはその後も生徒支援推進会議の中で継続的に報告された．

養護教諭はA男が保健室にいる様子についてSCにメモを残してくれるようになった．SCは時々保健室にいるA男のところに行き雑談をするようになった．保健室登校の子どもが3〜4名常時いたが，教員間でそれが問題になることはなかった．

4．再び休み始めた時期

こうした保健室登校が1ヶ月程度続いたが，保健室登校をしていたもう一人の女子生徒とそりが合わず，A男は再び休み始めた．

(1) 母親面接6（担任同席）〔X年10月〕

母親は，「昼夜逆転です」と申し訳なさそうに話した．担任からも，「訪問してもなかなか起きてくれなくてねえ」という話が出た．

母親への暴力の有無を尋ねると「無い」と言う．「私も四字熟語に気をつけてますから」と笑いながら話した．SCがA男について「息切れしちゃったかな」と言うと，それはないだろうと言った．「休みに入ると，もう駄目．遊び気分が抜けないんでしょうきっと」と突き放したように言った．前に付き合っていた有職・無職少年との交遊はなく，同級生と遊んでいるらしい．「約束は守るんだよ」という母親の約束をきちんと守っていて，これはこれで満足しているとのことだった．

母親は「学校に行かなくても自分の目標を聞くことができたので，満足本当はそれをやるための勉強法なりを学んでくれればというのがあるけれど」と言った．その目標が何かをと尋ねると，定時制に行って日中は仕事をすること，と話した．

担任の訪問は継続されたが，その訪問は安否確認の意味合いが強くなっていった．

(2) 母親面接7〔X年10月〕

母親は，面接には俺が来なくてもいいだろうという気持ちが見えると言った．暴力的なことは全くないが，その一方で，「ずるくなったのかもしれません．本人が世間体を気にしている．周りの目を気にしている．そのため，自分で学校に行くと言ってみたりするようになっています」という話をして，「なんとなく集団生活の大切さからは遠ざかっているのかもしれない」と懸念を示した．母親の話が以前と比べて理路整然としていることが感じられたので，SCはそれを指摘した．

(3) コンサル・チーム活動9〔X年10月〕

このまま訪問を続けた場合，本人の自発性を引き出すことができなくなる可能性があったため，担任との打ち合わせで定期的な訪問については中止することを決めた．

生徒支援推進会議の資料には，本人が将来のことを考え始め，母親がその相談に乗っているということが書かれ，それが全教員に回覧された．

5．「学校を利用する」ようになった時期

A男は再び保健室に登校するようになった．

(1) 本人面接1〔X年11月〕

どうして自分から来られるようになったのかを尋ねると，A男は家でゲームをするのにも飽きたし，ちょっと調べものをしたいと思ったので学校に来てみたと話した．調べものについて尋ねると，A男は多少照れながら「学校のこと」と言った．A男は自分の進学したい学校について調べるために登校しようと思ったと話した．

9月に行われた合同面接での四字熟語のエピソードを話しながら母親の様子を尋ねたところ「四字熟語がうまくいっている」と話した．SCは，コミュニケーションの変化を評価しながら，「ずいぶん大人になったな．来て当然のことを達成できているから，他人に見られても途中から入っても堂々として

Akita University

いられるね．前と変わって成長しているね」と現在の行動をリフレーミングした．そして，これからはお母さんを楽にするために協力してほしいと依頼した．A男はうなずいていた．

(2) 母親面接8（担任同席）〔X年11月〕

母親は，今日も学校に行った，とうれしそうに話した．母親によると，本人の進路の希望はゲーム関係とのこと．そのような話をA男との間でしていることを驚くと，これまで学校に行けと口うるさかった祖母も何も言わなくなってきていると他の家族成員の変化を話した．そしてA男の登校状態について「図書館みたいに学校を使っている」と評した．

(3) コンサル・チーム活動10〔X年12月〕

担任との協議では，「仕事とかの情報提供の場として学校を使っている」という意味を考えた．その結果，A男が「学校を利用している」のではないかということになり，A男が学校を利用しやすいように関わっていくことが提案された．

その後，A男は1ヶ月に数日に過ぎないものの，その週の初めに登校する日を予告してその日に登校するようになった．登校する日には必要に応じて，担任が迎えに行くこともあった．

この頃担任はもう一人の保健室登校の生徒にも積極的に関わっていて，「学校を利用する」という形での登校をする生徒はもう一人に増えていた．SCは保健室のA男のもとに行って雑談することを繰り返した．

(4) コンサル・チーム活動11〔X＋1年1月〕

生徒支援担当主任の働きかけにより，冬休みの職員研修においてA男の事例が提出され話し合われた．その中で「学校を利用する」という考え方が担任とSCによって改めて教員に提示された．

その後も，A男は時々登校した．それは1ヶ月に数日という頻度だったが，彼が予告して登校をすると，先生方がプリントを持っていったりした．

この段階でSCは関わりの間隔を徐々に開けていった．一方，担任は本人の必要に応じて進路指導を継続的に行なった．そして，本人も必要なときには担任のところに行って，資料を見せてもらったりすることを続け，就職先を母親と一緒に見つけた．

A男は，そこの社長の勧めで定時制高校に通うことを考えるようになり，試験のための面接の練習も自分から申し込み，それを他の生徒一緒に練習をしたりしていた．

2月に行なわれた年度最後の生徒支援推進会議のA男とその家族に関する記述内容を表2に示す．（表2）

表2　生徒支援推進会議資料（2月）

授業には参加する気持ちはないが，相談室で面接ガイドを使って学習した．給食は自分の班で一緒に食べることができた．母親は本人が就職したときのために自主的に雪かきを行なって体を鍛えようとしていることをうれしく思っている． また，就職をほぼ手中にし，そこの社長さんの勧めで定時制高校を受験する意欲も出てきたためありがたいと思っている．左官職を体験して，正式に採用されたいという思いが出たため，是非とも採用されることを願っている．今の気持ちを忘れず，頑張って生活してほしいが，正月以来昼夜逆転の生活をしているので生活リズムだけは整えることができるようになってほしい．

卒業後，A男は左官の見習いを続けながら，定時制高校に通学し始めた．

Ⅳ　考察

1.　学校の語り（ナラティヴ）

学校の語りは，教師や生徒，地域の関係者等が織りなす語りの総体と考えられる．こうした関係者の語りは，学校の語りにどのように影響を及ぼすのだろうか．また，学校の語りは関係者の語りにどのように影響を及ぼすのだろうか．

「物語は現実を組織化し，混沌とした世界に意味の一貫性を与えてくれる（野口，2002）」．すなわち，学校における職員や生徒の態度，行動はこうした学校の語りの上に形成される．また，「物語は，自体を理解する際に参照され，引用され，私たちの理解を一定の方向に導き制約する（野口，2002 ）」．すなわち，学校の語りは生徒の理解についても，教師に対して一定の制限を与えることになる．生徒一人ひとりの行動や性格の理解も，学校の語りの上で形成されていく．例えば，一度も不登校の生徒を経験したことのない学校と，多くの不登校の生徒がいる学校では，同じ不登校でもそのとらえ方や対応の仕方は大きく異なるであろう．さらにそこには，様々

Akita University

な語りが繰り返されることによって，その姿が現実のものとなっていくという循環が生じる．

これまで，こうした生徒に関する語りは，しばしば「欠損記述（Winslade & Monk, 1999)」と呼ばれる，正常と比較して何らかの欠損があるという記述と結びついてきた．表1で示したとおり，4月の生徒支援推進会議では，睡眠サイクルに問題があるために登校できないという不登校の原因の説明が行われている．そして，この状況の説明として母親と祖母の関係がうまくいっていないこと，母親と子どもの会話が無いことが指摘されている．しかしこれらの理由の出所は不明な上に，睡眠サイクルと会話がないことの間に明確な関連は示されていない．

2. A男とその家族

このように，A男とその家族に関する中学校の理解は欠損記述に基づいたものだったと考えられる．担任の話や生徒支援会推進会議資料から分かるとおり，児童相談所で何らかの発達的な偏りが疑われていたにもかかわらず，本人の不登校は母親の関わりという家族の問題との関連の中で理解されていた．興味深いのは，父親の自殺に関しても，不登校と同様のレベルで母親（妻）の関わりという視点で理解されていることである．この学校の持つ一時期荒れていたという歴史や，そこから立ち直ってきたという教員たちの矜持，そこから生じたと考えられる生徒の管理や統率を重視する考え方など，現在にいたる様々な学校の語りが，原因論を重視する欠損記述の背後にあるものと推測できる．担任は，自分が家庭訪問をしたときには学校に来ることができているという「例外」を見つけているが，このような欠損記述に反するようなエピソードは表だって語られることはなかった．これは，この学校における欠損記述の拘束力の強さを示している．

3. 介入とそれに伴う変化

本事例では，二つのシステムへの介入が行われている．一つはA男とその母親の家族システムへの介入であり，もう一つは学校システムへの介入である．実際にはこれら二つの介入を明確に分けることができない．また，介入を続ける中でA男とその家族を取り巻くシステムそのものが自然に変化し始めている．そのため，ここでは便宜的に，(1) 学校システムへの介入，(2) 家族システムへの介入，(3) システム介入に伴う自然な変化，に分けてどのような変化が生じていったのかを考察する．

(1) 家族システムへの介入

合同面接1で示されたように，母親とA男のコミュニケーションがうまくいっていなかったのは明らかだった．母親は，夫を自殺で亡くしたという引け目にも似た感情を常に感じていることが推測された．そして，夫からこの子を託されたという気負いが母親の会話を抽象的かつ感情的で，冗長なものにさせていた．また，A男との会話の中には，「学校に行きなさい」と「自分で考えなさい」という二重拘束的なメッセージが常に含まれていることが面接での会話から推測された．そのため，A男はこのような母親の言葉を理解することができず，母親の言葉を聞くたびにイライラしてくる状態を繰り返していたといえる．

SCが始めに試みたことは，二人とも理解できるコミュニケーションを構築することだった．SCは，母親の「学校に行きなさい」という言葉の出現頻度を変化させることを考え，ゲームによって一日の言動を変えることを試みた（母親面接3)．しかしこの試みは，かえってA男の自動車のテールランプを壊すといった反発を生み出してしまうことになった．そのため，その後は母親の現状に対する無力感に焦点を当てエンパワメントすることを中心にした関わりを継続し，学校システムへの働きかけを中心に考えていくようになった．

(2) 学校システムへの介入

担任は，A男が普通に登校できていた1年生のときの担任であり，その関わりについてはSCよりも多くの知識を持っていると推測された．そこでSCは，できるだけ担任が面接に参加できるように働きかけた．これは，ナラティヴ・セラピーにおける「アウトサイダー・ウィットネス（Russel & Carey, 2004)」の実践といえる．担任の面接参加が，結果的に生徒指導推進会議資料を利用してのA男家族の異なった見方を発信することにつながっていった．これは，今後繰り返されるA男家族に対するオルタナティヴ・ストーリー（White & Epston, 1999）の構築につながっていったと考えられる．こうした担任の行動は，担任自身の母親に対する問題意識を変化させていくことにもつながったことがうかがわれる．朝食を持参しての熱心な家庭訪問（コンサル・チーム活動8以降）や，四字熟語の会話（合

Akita University

同面接3）は，こうした母親に対する認識の変化が生み出したものであるといえよう．ここには，A男家族をめぐるオルタナティヴ・ストーリーが行きつ戻りつしながら，その物語を生み出したA男や母親，担任といった当事者自身を変化させていく様を見ることができる．そして，担任はA男の卒業まで，常に中心的な役割を果たしていくことになる．

(3) システム介入に伴う自然な変化

システムの構成素の変化はシステム全体に影響を及ぼす（遊佐，1984）．担任による家族への支援は学校の中に協同的に作業する関係者を生み出していった．これは，「関心コミュニティ（Winslade & Monk，1999）」，すなわち変化を認識し共有する人々の集まりが形成されていったことを示している．このとき不登校という言葉は，関係者を結びつけるタグの役割を果たす．そして，タグに書かれた名前がその集団にとって重要なものであればあるほど，関係者は結びつきやすくなる（柴田，2008）．非行が落ち着きを示し，不登校が増加傾向にあった学校という背景要因がであったからこそ，関心コミュニティの形成が容易に進んだ可能性がある．そして，こうした関心コミュニティの形成には，やはり生徒支援推進会議の報告書が役立ったことがうかがわれる．A男に家庭内暴力が発覚したとき，従来行われていたような他機関利用や，本人とその家族への強い説諭をせずに情報提供に徹した危機介入ができた（合同面接2，コンサル・チーム活動7）のは，関係者全員が回覧されていた報告書に目を通していたからと考えられよう．

関心コミュニティの形成はA男とその家族にとどまらない多方向での変化を繰り返すことになる．例えば養護教諭や生徒支援担当主任がこれまで禁止されていた保健室登校の実施を強く働きかけ，それが実現したこと（コンサル・チーム活動8）や，養護教諭によるA男の状態についての報告が継続的に行われたこと（合同面接3以降）がこうした多方向での変化をうかがわせるものとなっている．

この段階に至ると，A男と母親を取り巻く欠損記述そのものがあまり語られなくなってくる．A男は保健室登校の状態から再び休み始めるのだが（4. 再び休み始めた時期），母親を含めた関係者の中でそのことが問題視されることはなく，「母親の約束を守っている（母親面接6）」ことや「本人が将来のことを考え始め，母親がその相談に乗っている（母親面接7以降の生徒指導推進会議資料）」といった，「例外」に注目した発言や記述が増えている．そしてこうした関係者間の語りの変化が，「学校を利用する」という新たな語りを生み出すことになる．

4. 「学校を利用する」という言葉

「学校を利用する」という言葉は，母親の「図書館みたいに学校を使っている」という話から，SCと担任が協議する中で思いついた言葉である．実際にはA男の登校日数はきわめて少ない状態であり，このような表現ができるような状況ではなかった．しかし，これはA男が自分から登校しているという主体性を認め，SCが本人に伝えていた「成長している」という意味とも適合するものだった．担任自身も，これまでの関わりの中でA男の成長を感じていた．こうした二人の考えが，あえて「学校を利用する」という言葉をA男のあまり変化しない現状に対して使ってみることを決心させた．

結局この言葉は，校内研修会を通して，関係者だけでなく教員間全体で当然の認識に変化していき，この学校の不登校の在り方に新たな視点を作り出すことになった．「学校を利用」している生徒がもう一人増えたことが，こうした認識が教員間で形成されたことを示している．表2は2月に提出された生徒支援推進会議資料である．この中には，4月の資料で示されていたような原因論的な欠陥記述は認められなくなり，報告した担任による，A男が職場で採用されればよいという率直な願いが書かれるようになっている．この段階では表1で書かれたような欠損記述は認められない．

「物語は，自体を理解する際に参照され，引用され，私たちの理解を一定の方向に導き制約する（野口，2002）」．「学校を利用する」という言葉に至るA男をめぐる教員間の語りの変化は，教員自身の不登校に対する理解を，欠損記述や問題行動という理解から可能性という理解に変化させたと考えられる．こうした変化がSCにより無理に生じさせられたのではなく，自然な変化として生じていることが興味深い．これが語りの持つ潜在的な力であると考えられる．

V おわりに

この事例を通して強く感じたのは，教師が欠損記述にとどまらない様々な考え方を持っているという

Akita University

ことだった．データとしての記録はないが，A男を取り巻く物語が欠損記述から離れていったとき，これまでは考えられなかったような様々な語りが教員間で行われていたことを記憶している．こうした様々な語りは，目の前にいる生徒を何とかしようとする教員の思いから生じたものであろう．原因論をもとにした欠損記述は，教師の持つ生徒を何とかしようとする思いや行動に制約を与えているように思えてならない．欠損記述そのものが問題なのではなく，問題に対して一対一対応にならざるを得ない欠損記述の特徴が，多様な語りを制限してしまうのだと考えられる．SCとしての職務は，欠損記述ではない事例理解をし，それを何らかの形で教師間に発信していくことではないかと考える．それを続けていれば，変化は自ずと起こってくるだろう．

引用文献

赤川　力　2010　スクールカウンセリングにおける思春期男子との心理臨床 — 地域環境と個性化プロセスについて　心理臨床学研究27（6），675-682.

DeJong, P. & Berg, I.K. 2008　*Interviewing for solutions. 3rd Edition.* Belmont : Thomson Brooks/Cole. 桐田弘江・玉真慎子・住谷祐子訳　解決のための面接技法第3版　金剛出版.

伊藤亜矢子　2001　学校風土とスクールカウンセリング　臨床心理学1（2），153-159.

小森康永・野村直樹　2003　ナラティヴ・プラクティスに向けて　現代のエスプリ433，ナラティヴ・プラクティス，5-12.

倉光　修　2004　第1章総論　大塚義孝・岡堂哲雄・東山紘久・下山晴彦（監修）　臨床心理学全書12　倉光　修（編）　学校臨床心理学　誠信書房　pp1-34.

野口裕二　2002　物語としてのケア——ナラティヴアプローチの世界へ　金剛出版.

Russel, S. & Carey, M. 2004　*Narrative therapy-responding to your questions.* Adelaide : Dulwich Centre Publications. 小森康永・奥野光訳　ナラティヴ・セラピーみんなのQ&A　金剛出版.

柴田　健　2008　相談機関による「ADHD（疑い）」という言葉がもたらしたもの——児童相談所での一経験から　ブリーフサイコセラピー研究17(1)，48-51.

Winslade, J. & Monk, G. 1999　*Narrative counseling in schools.* Thousand Oaks : Corwin Press. 小森康永訳　2001　新しいスクールカウンセリング：学校におけるナラティヴ・アプローチ　金剛出版.

遊佐安一郎　1984　家族療法入門——システムズ・アプローチの理論と実際　星和書店.

Summary

This paper examines the "*Narrative Practices*" applied to a case concerning a student at a junior high school. His teacher assumes that causes of the troubles such as domestic violence and so forth the student made can be resulted from his mother and her discipline to her son. The school counselor conducted some counseling to the student, his mother, and his teacher, and some consultations with the teacher and the related people. Since then the number of teachers who pay close attention to the student has increased. Along with that, his teacher's narrative about the student has changed from how his mother cannot treat him right to what he and his mother have done to make things better. This change brought the teachers new perspectives about the other students who stopped going to school. Although there have been ups and downs about the boy's behaviors at school, finally this new and effective idea, "*Using School*" was developed. In *Discussion*, the author points out that the new idea, "*Using School*" might have created "*Community in Concern.*" The author also points out that the "*Community in Concern*" brought constant changes in the narrative. These changes might be resulted from the potentials of narrative which would restrict and would lead us to a certain direction.

Key words : School Counseling, School Refusal Behavior, Narrative Therapy, Narrative Practice

(Received February 15, 2010)